

水稲奨励品種「きぬむすめ」の特性

特性の概要

- ◇出穂期・成熟はほぼ日本晴並でヒノヒカリより、4～6日早い
- ◇稈長は短く倒伏しにくい
- ◇穂数が多いと収量が向上する。
- ◇外観品質が良く年次変動が少ない。
- ◇炊飯米の粘りはやや弱いがコシヒカリと同程度の食味
- ◇白葉枯病に弱い

表1. きぬむすめの特性概要 1998～2007年、場内試験結果

	きぬむすめ	ヒノヒカリ	日本晴
出穂期	8.17	8.21	8.16
成熟期	10.03	10.09	10.02
稈長 (cm)	81	84	84
穂長 (cm)	17.9	19.0	20.5
穂数 (本/m ²)	390	409	398
全重 (kg/a)	171	184	172
精玄米重 (kg/a)	58.3	53.5	61.0
比率 (%)	96	88	100
玄米千粒重 (g)	22.9	22.2	24.1
外観品質 (1～9)	3.9	4.7	4.5
検査等級	3.2	4.0	4.0
倒伏程度 (0～5)	0.3	0.4	0.8
葉もちほ場抵抗性	中	やや弱	中
白葉枯病抵抗性	弱	やや弱	強
縞葉枯抵抗性	0:罹病性,日本水稲型(+)	0:罹病性,日本水稲型(+)	0:罹病性,日本水稲型(+)
穂発芽性	やや難	難	やや難

注1) 移植期は5月28日で施肥は以下のとおり

標肥:Nkg/10aで5-0-3-2(基肥-中間肥-穂肥 I-穂肥 II)

注2) 精玄米重、千粒重、品質、等級:()内のグレーダーで調整したもので調査
1998～2000(1.8mm),2001～2007(1.85mm)

注3) 品質:1(上上)～9(下下)

注4) 等級:1(1等上)～9(3等下)※検査等級は2002,2001はデータなし

注5) 倒伏及び病害虫発生程度:0(無)-5(甚)

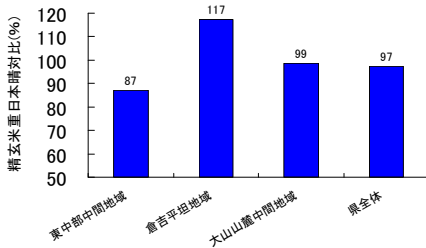


図1. きぬむすめの収量の日本晴対比
注) 平成14,18,19年の現地試験数字

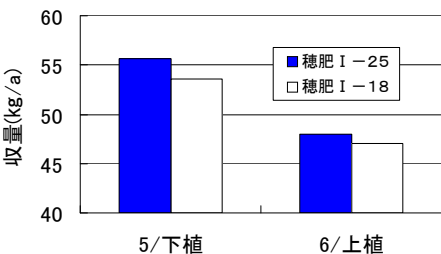


図2. きぬすめの作期及び穂肥時期による収量の相違
2007場内栽培
注) 施肥はNkg/10aで5-2-2(基肥-穂肥 I-穂肥 II)

炊飯米の食味はコシヒカリ並

現地の収量も日本晴よりやや低め

5月下旬植,第1穂肥幼形期施用で収量安定

収量向上は穂数の確保が肝要

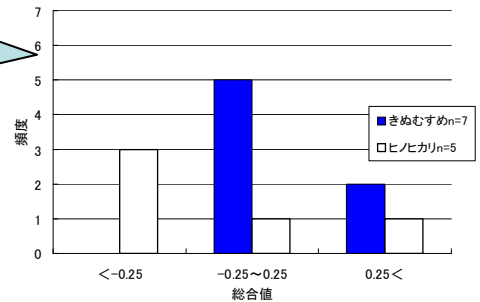


図3. 中生品種の官能食味総合値の頻度
注) 官能食味試験: 場内及び穀物検定協会
平成19年産、比較品種: コシヒカリ

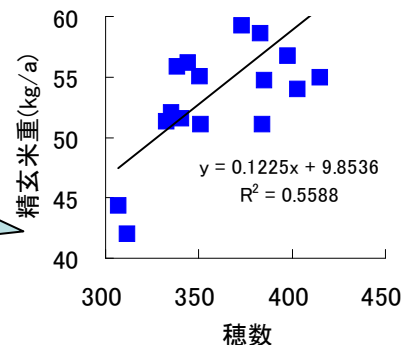


図4. きぬむすめの穂数と収量の関係
1998～2007場内奨決,2000,2007場内栽培

基肥は日本晴基準(窒素5kg/10a)で充分です

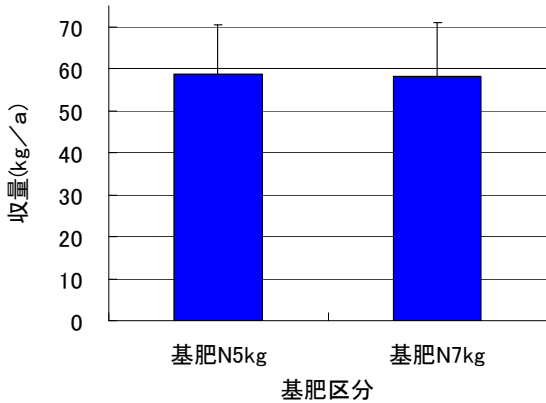


図5. 基肥量による穂数の相違
2000~2002,2006,2007場内奨決
注)グラフ内の誤差線は標準誤差(n=5)

収穫適期は出穂後40~45日

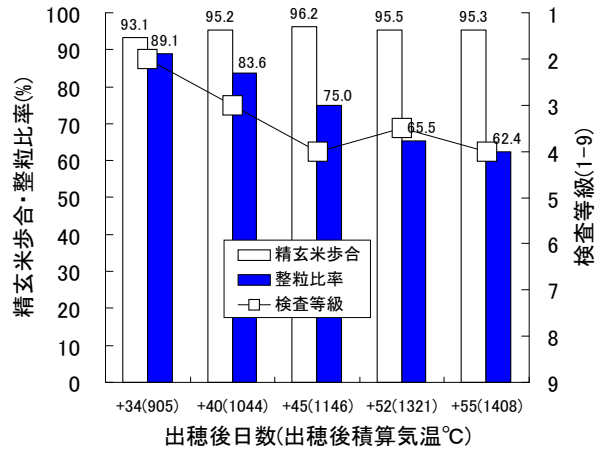


図6. 刈取時期による各要素の推移
2007場内栽特(5/22植,穂肥:幼形期)

刈取適期の籾の外観です

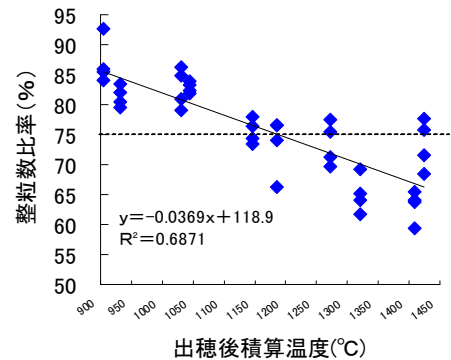


図7. きぬむすめの出穂後積算気温と整粒比率との関係
2007年場内2作期(移植期:5/22,6/5)

出穂後40日
積算温度1044°C
青籾率13%
籾水分24%

~

出穂後45日
積算温度1146°C
青籾率5%
籾水分22%

出穂後45日(積算温度約1150°Cを過ぎると品質が下降傾向になります。)

- ◇ 中生・強稈品種であり日本晴の作付可能地帯が適応地域
- ◇ 白葉枯病の常発地帯での栽培は避ける
- ◇ 栽植密度を18~21株/m²とし日本晴に準じた肥培管理で初期の生育量と穂数確保(330本/m²)に努める

問い合わせ先 : 鳥取県農業試験場 作物研究室
電話 : 0857-53-0721